

子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発(6)

— 幼稚園年長「発見・表現の時間」の開発を中心に —

井上 弥 朝倉 淳 池田 明子 君岡 智央
中山美充子 青原 栄子 石井 信孝 大橋美代子
金田 敏治

1. 本研究の経緯

本研究は、幼小連携研究の歴史を持つ広島大学附属三原幼稚園（以下、幼稚園）及び広島大学附属三原小学校（以下、小学校）での実践を事例として、幼稚園（3歳から5歳）と小学校低学年（第1学年から第2学年）の教育内容を子どもの経験の蓄積という観点から見直し、子どもの経験が階層的に生かされるカリキュラムとして提案することを目的とする。

第1年次は、園児・児童の実態観察・ビデオ分析を通して、めざす子ども像を設定し、その姿に迫るために、小学校第1・2学年に新教科「発見」科（以下、発見科）と「表現」科（以下、表現科）を設置し、単元開発及びカリキュラム試案を作成した。発見科は認識の基礎を、表現科は表現力の育成を目的としている。

第2年次は、カリキュラム試案に基づいて保育・授業を実践し、同一題材や関連した内容について、発達段階に応じた活動・単元開発を行った。

第3年次は、保育・授業を実践する中でカリキュラムの修正を行うとともに、発見科・表現科を設置したことによる子どもたちの変容の調査・分析を行った。

第4年次は、幼稚園年長の園児が一層「感じたりイメージしたり発見したり考えたりする経験」が積めるように、発見科と表現科の両者の視点で保育を行う「発見・表現の時間」を新設した。そして、園児の実態を踏まえるとともに、小学校発見科・表現科と関連づけて目標を設定し、3本の新しい活動開発を行った。

第5年次は、「発見・表現の時間」と発見科及び表現科の目標や内容の系統を整理するとともに、「発見・表現の時間」の活動内容の開発を行った。

第6年次にあたる本年度は、「発見・表現の時間」を設置したことの効果について、第5年次に集積した子どもたちのエピソードをもとに分析した結果を考察

し、その成果と課題を示す。

2. 「発見・表現の時間」の目標と内容

2.1 目標

年長児の実態や発見科及び表現科との関連を考え、「発見・表現の時間」の目標を次のように設定した。

身近な自然やものや人に積極的にかかわる中で、様々な感覚をはたらかせて、発見したことや考えたこと・感じたことやイメージしたことを、表したり発展させたりする力を養う。

2.2 活動内容の柱

日々の活動を「発見・表現の時間」の目標の観点から見つめなおし、4つの活動の柱を設定した。

「さがそう・遊ぼう・育ててみよう」

身近な自然事象との直接体験の中で、特に小動物へのかかわりに重点を置く。

「見てみて・触って・食べてみよう」

身近な自然事象との直接体験の中で、特に植物へのかかわりに重点を置く。

「作って・創って・大変身」

この柱は、自分たちの思いやイメージしたことを表していく製作活動と、踊りや劇、身体表現などを創り出す活動の二つに分かれている。製作活動では、様々な素材とふれあいながら、イメージしたことや課題になっていることを、試行錯誤して表すことやイメージしたことを友達と伝え合ったり見合ったりし、良いところを生かして製作することに重点を置く。踊りや劇、身体表現などを創り出す活動では、身近なものや人とかかわり、様々な刺激を受けて感じたことからイメージを膨らませ、自分たちがイメージしたものになって

Wataru Inoue, Atsushi Asakura, Akiko Ikeda, Tomochika Kimioka, Fumiko Nakayama, Eiko Aohara, Nobutaka Ishii, Miyoko Ohashi, Toshiharu Kaneta : The Curriculum Development for Collaboration between Kindergarten and Elementary School from the Point of Children's Experiences (6)

いくよう踊りや劇、身体表現などで工夫しながら表すことに重点を置く。

「やってみよう〇〇を！ なってみよう〇〇に！」

自分たちになりたい〇〇（例：お店屋さん・大工さん）になるため、それらに関係した気づきや発見をどこ遊びに取り入れることと、なりたい〇〇をより本物

らしくするために試行錯誤し、工夫して表すことにも重点を置く。

3. 年間の活動の概要

第5年次（2007年度）の「発見・表現の時間」の年間の活動の概要を表1に示す。

表1 「発見・表現の時間」 年間の活動の概要（2007年度版）

期	月	活動内容の柱			
		「さがそう・遊ぼう 育ててみよう」	「見てみて・触って 食べてみよう」	「作って・創って 大変身」	「やってみよう〇〇を！ なってみよう〇〇に！」
9期	4	「うさぎと遊ぼう」 ・飼育当番 	「アスパラガス大発見！」 ・成長を観察する ・収穫して食べる	「自然と遊ぼう」 * 砂場遊び ・スコップで穴を掘る ・雨どいで水を流して川を作る ・はだして砂・土・泥の感触を楽しむ ・協力して砂山を大きくしたり、トンネルをつなげたりする ・料理を作る	「家族ごっこ」 ・役を決める ・役になりきる ・ごちそうを作る
	5	「レンガに隠れている虫を見つけよう！」 「アメリカザリガニ・カタツムリ・カブトムシを飼ってみよう！」	「秘密の夏野菜をクラスで栽培」 「ミニトマトの個人栽培」 「サツマイモの苗植え」 ・年少組を連れてよもぎ摘みに行き、特徴などに気づいたり、教えてあげたりする ・取ってきたよもぎをグループで協力してすりつぶしたり、まるめたり、煮たりする	「すんでみたいおうちをつくろう！」 ・絵本をきっかけに住んでみたいお家をグループで作る ・他のグループの良いところを取り入れてイメージを膨らませる	
10期	6	・子どもたちから、そろそろ当番活動しようという声があり、当番活動を始め			
	7	「バツタをつかまえよう」 ・虫かごを作る ・景雲台や園庭で虫とりをする ・つかまえてきた生き物を観察したり、飼いや食べ物を図鑑で調べたりして、生き物のお家づくりをする			
11期	8	・うさぎとふれあう ・うさぎの気持ちについて話し合う ・当番をして楽しかったことなどを紹介する			
	9				
12期	10	・年中組の当番活動が始まる ・年中組さんに、餌を入れるカゴを教えてあげる ・年中組の餌を小屋に入れる	「どんぐりクッキーづくり」 ・城跡公園にどんぐり拾いに行く ・園内外にどんぐり・落ち葉拾いに行き、色々な種類のどんぐりや葉があることに気づく	「自然と遊ぼう」 * どんぐり拾い * 落ち葉拾い 「身近なもので楽器を作ろう」 ・マラカスづくり ・1年生さんの授業を見に行く ・物語に合わせて音を作る	・秋の自然物を使って料理を作る
	11		「いもほり」 サツマイモを収穫し、数を数えたり、大きさを比べたりする 「やきいも」 ・やきいもに使う落ち葉を拾う ・煙の匂いややきいもの味を楽しむ ・やきいもの後の灰や炭で遊ぶ		
13期	1				
	2			「劇遊び」 ・お話を決める ・役を作る ・やりたい役になる ・相談して台詞や動きを考える ・道具を作る ・なりきって演じる ・おたのしみ会で発表する	「みんなでこま回しをしよう！」 ・目的をもってこま回しをする ・こまに色をぬったり、テープを貼ったりして飾る
	3				

4. 「発見・表現の時間」を設置したことの効果

幼稚園年長児に「発見・表現の時間」を設置した効果を明らかにするために、エピソード評価を行った。具体的には次の通りである。

4.1 評価の方法

保育者が保育を振り返った際に印象に残っているエピソードを集積していき、1年間でどのように子どもの姿が変容しているかの分析を行った。分析の方法としては、エピソードを分解してKJ法で分けていき、それぞれのカテゴリーごとの変容を明らかにすることを行った。なお、エピソードを集積する際に、発見・表現の視点に焦点化したものに限定すると、保育者の意図に偏ってしまいがちになり、子どものありのままの変容の姿が反映しづらいので、あくまでも保育者が保育全般の中で心に残ったエピソードを集積していくことを配慮した。また、エピソードの後に保育者のコメントを付け加えることで、保育者の印象に残ったその要因を明確にし、エピソードをカテゴリーごとに分けやすいようにした。

エピソード集積は、春（2007年4月～5月）と秋・冬（2007年10月～2008年2月）の年2回行った。

4.2 エピソードの具体例

具体的にどのようなエピソードを集積していったのか、春のものと秋・冬のを1例ずつあげる。

4月11日

保育者が積み木の部屋に入ったちょうどその時、G男・K男・L男・D男・j女・m女がおばけやしきの中に入り込んで姿が見えない状態で、中でおしゃべりをしている声が聞こえてくる。保育者は「あれえ、さっきまでき組さんが遊んでいたはずなのに、どこへ行ったんだろう？」と声を出してみる。すると、子どもたちの声がピタッととまる。さらに、保育者は「おかしいなあ、子どもたちはどこへ行ったんだろう？」と声を出しながら、積み木の部屋を探し始める。すると、「うわあ～っ！！」と言いながら、おばけやしきのドアから一人ずつが保育者を驚かそうと出てくる。保育者も「うわあ～！！びっくりしたあ！！こんな所にいたの？みんなの姿が見えなかったから誰もいないかと思ったよ。ああ、本当のおばけかと思ってびっくりしたあ」と言っていると、子どもたちは満面の笑みで得意げな表情をする。

<コメント>

新しい環境にも少しずつ慣れ、年長児として頑張っ

ている姿も見られていたが、一方で気の合う友達と楽しく過ごすというひとときを感じて欲しいと願う。したがって、狭い空間に一緒にいるという親近感をしっかりと感じて欲しいと願い、保育者がこのようにかかわっていった。このような積み上げがのびのびと自分の思いを出しながら遊ぶ楽しさを味わっていくことにつながっていくと考える。

11月8日

もも組（年少組）の園児がバッタがつかまえたののに、探してもいないと泣いている。年長児に尋ねたらバッタのことが分かるかもしれないということで、年長児に「バッタはおりますか？」と尋ねにくる。B男は「う～ん。でもねえ、今は秋じゃけえバッタはおらんかもしれんよ。夏じゃったらバッタもチョウもおらんかもしれんけど、秋はチョウしかおらんよ」とちょっぴり照れくさいのか、もも組さんからは視線をはずしてはいるが、いろいろと考えながら話してくれる。それでももも組さんがあきらめきれずに探していると、今度はE男が一生懸命探してくれる。その結果、本当にバッタを捕まえ、「ちょっと握りすぎたから、弱っとなるかもしれん」と言いながら、もも組さんに渡す。

<コメント>

B男はバッタはすでに最近いなくなっていることに気づいていて、そのことを照れながらも言葉をかみくだいてもも組さんに分かるように具体的に話している。E男はいないかもしれないバッタをあきらめずに探すという行動を起こしている。捕まえたバッタを握りすぎるくらい握っていたというその姿に、もも組さんのために何かしようという強い気持ちが見られた。相手のために何かしようとする時に、“相手のために”という気持ちがあるということとともに、どこを探せばバッタがいるかということが分かる体験をもちあわせているということも必要だということを感じた。

4.3 「発見・表現の時間」を設定した効果

4.2で記述したようなエピソードの1年間の集積をカテゴリー別にまとめたものが、表2である。表2では、カテゴリーごとに分類されたエピソードの一部を示している。また、図1では、カテゴリー別エピソードの割合の変化を示している。

エピソード評価の結果、図1に示されるように次のような点で「発見・表現の時間」を設定した効果が見られた。

・春頃は発見・表現を促す保育者の存在が必要であっ

たが、秋冬には子どもたちが自発的に発見・表現をしようとする態度が多く見られるようになってきた。

・「興味から追究」「試行錯誤しながら表現」「表現が表現に発展」などの項目が秋・冬には増えてきた。

表2 カテゴリーごとに分類したエピソード一覧（一部掲載）

カテゴリー	時期	エピソード例
1 注意深く見ることで発見	春	・虫眼鏡でアスパラガスを観察したときに、アスパラガスの先っぽはつぶつぶがいっぱいいていることを発見した（4/19） ・飼っているザリガニと図鑑を見て、ザリガニははさみが小さいほうがメスだということを何気なくつぶやいた（4/26）
	秋・冬	・レタスのプランターに貼るための絵を描いたとき、うさぎの口がYの字のようになっていたことに観察して気付き、絵に描いた（11/5） ・何かを発見しようと意気込んで、保育者を手伝って落ち葉を集めていたとき、同じ形で、同じ葉っぱなのに色が違うということを保育者に知らせた（11/8）
2 保育者の言葉がけから発見・表現	春	・保育者の言葉がけから、茎や枝が伸びきったアスパラガスも同じアスパラガスであるということに気付いた（4/18） ・「本当は苗に何ができるのかなあ」という保育者の言葉がけにより、絵を描いて、絵の話話しながら思いを表現した（5/25）
3 クラスの話し合いの中で表現・発見	春	・はさみの大きさがオスとメスで違うということをおもひの前で保育者が話すと、図鑑をよく見ていた子がザリガニのオスメスに関わらずしっぽの大きさは一緒ということを使った（4/26） ・苗に花が咲いたことを保育者がみんなに紹介したことで、子どもたちが考え、想像しながら、トマトやピーマン、きゅうり、すいかができたらいいなと話した（5/24）
4 自然に積極的に関わる	春	・ヤエムグラが服などにくっつくことを教えてもらい、そうっと触ってみて感触を楽しんだり、くっつけて逃げることを楽しみながら、ヤエムグラの草が服やエプロンにくっつくことを発見し、感動の声をあげる（5/2）
	秋・冬	・「どんぐり」の絵本を読み、どんぐりが落ちている公園に行ったとき、絵本を見ながらどんぐりの木の葉の形を調べていた（10/22）
5 興味から追究	春	・アスパラガスの下はどうなっているのかという疑問から、手やスコップで掘ってみて、アスパラガスの根は白く多いということを見つけた（4/18）
	秋・冬	・「どんぐり」の絵本を読み、どんぐりが落ちている公園に行ったとき、土の下にどんぐりが埋まっているかもしれないので掘って確かめた（10/22） ・砂場でコマを回したとき、軸の回転により砂に穴があいたことを発見した（2/14）
6 材料をもとに発見・表現	春	・神明さんごっこで、かき氷に見立てておはながみを丸めて紙コップに入れ、スプーンをさして作り、おはながみの色によって味の違いを表した（4/12）
	秋・冬	・大小のダンボールの太鼓をたたいたことで、ダンボールの大きさによって音の大きさが違うということに気付いた（11/12） ・エルマーの冒険のどうぶつ島の地図の壁面工作に取り組んでいたとき、ヨーグルトカップで家づくり、綿棒とモールで煙のモクモクとした形を作った（11/26）
7 保育者・親に見てもらいたい	春	・城跡公園へ行き、堀の亀や鯉、鴨などを見ていたとき、鴨のきれいに気づき、早く見せたくて保育者の手を引き、鴨を指差した（5/8）
8 試行錯誤しながら表現	秋・冬	・写真を見て気に入ったため、試行錯誤しながら木のプランコを作った（11/14） ・エルマーの冒険のどうぶつ島の地図の壁面工作に取り組んでいたとき、みんなと別の作り方でトラを作り、厚紙で体をガチャの容器で顔を作って、立たせようとしていた（11/26）
9 問題を解決しようとする	春	・神明さんごっこで、ジュースのふたを作りたいと考えていると、g女がアイデアを出し、おはながみをコップにかぶせて作った（4/12）
	秋・冬	・本物の小太鼓と比べてダンボールの太鼓の音が小さかったとき、そばにいたf女の発言から、大きめのアルミ缶のほうがダンボールよりも大きい音がすることを発見した（11/21） ・ビー玉がビー玉転がしをうまく転がらなかったとき、はみ出るところに板を置く（11/26）
10 考えて行動・友達や年下への配慮	春	・ウサギの穴を掘るには土が固くて、時間も労力もかかってしまうとき、ウサギの穴を掘るには水を入れて土を柔らかくすればいいということを2人の女児がみんなに教えた（4/20）
	秋・冬	・保育者が大まかな言葉がけをただけでその場を離れたにも関わらず、年少・年中が先に焼き芋をもらえるように焼きもをもらうコーナーを作って、声をかけて並ばせていた（11/19）
11 表現が表現に発展	秋・冬	・せみ型飛行機を様々な大きさや厚さの紙で折って遊んだとき、小さい折り紙でも飛行機を作り合体させ、名前をつけて、合体した飛行機を作った（10/11）

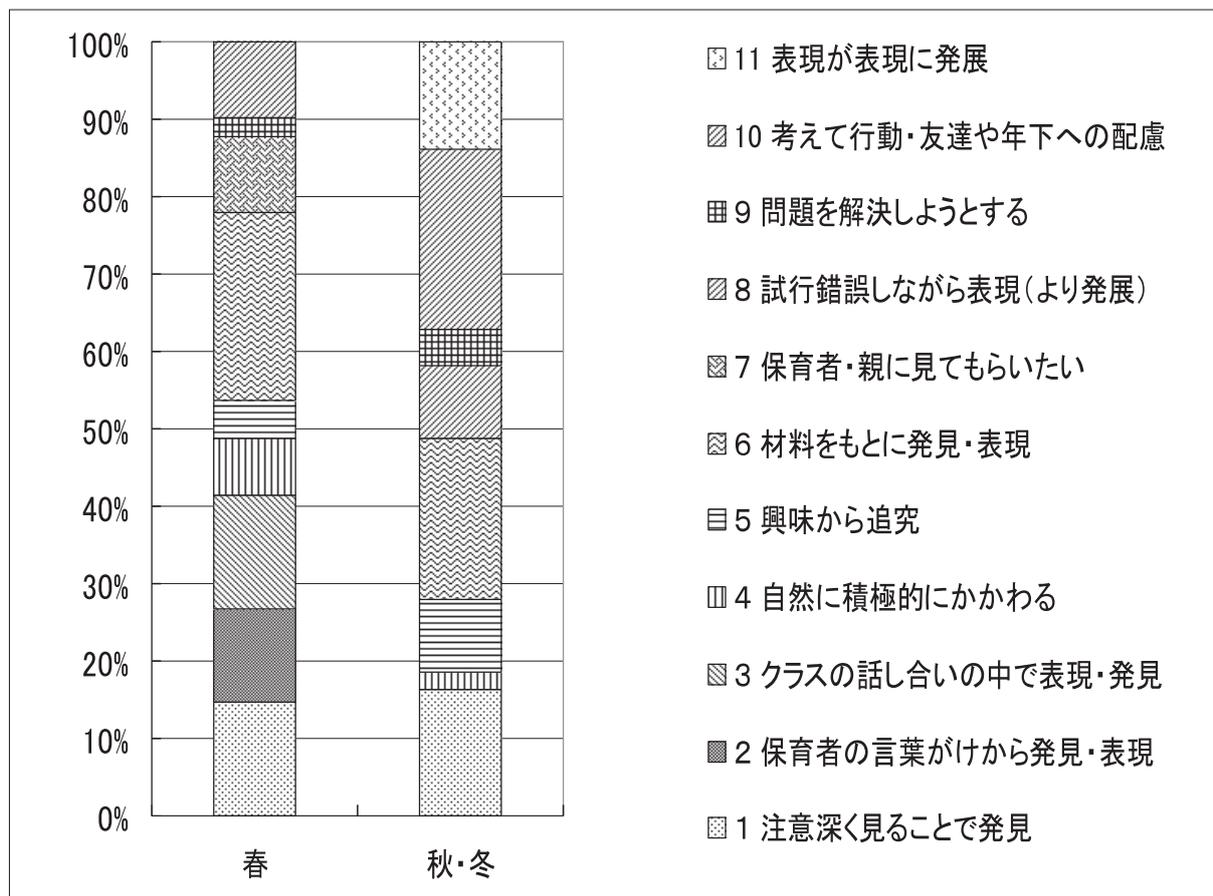


図1 カテゴリー別エピソードの割合の変化

5. 成果と課題

以上のように年間を通して「発見・表現の時間」の実践を進め、評価を行うことで次のような成果と課題が見られた。

- ・子どもたちの実態から年長児に「発見・表現の時間」を設置した結果、4.3で述べたような効果が見られたことが何よりも大きな成果であった。
- ・また今回は、「発見・表現の時間」の効果を見るためのエピソード評価を行ったことにより、11のカテゴリーが明らかになり、それを発見したり表現したりする子どもの姿を細かく見取るための視点としても生かすことができた。カテゴリーごとの変容を明らかにすることで、年間の子どもの育ちの見通しをもつことができるようになった。具体的には、春の時期には子どもたちが発見したり表現したりしたことにしっかりと共感したり認めたりすることが、秋から冬にかけての、子どもたちが自発的に発見したり表現したりする子どもの姿につながっていくことが明らかになってきた。そのことで、本年度は、1年間の子どもたちの成長を見通し、その時期に大切にすべき視点に着目しながら、その時期にふさわしい保育計画を考えたり環境構成を整えたりすることができるようになってきた。

- ・今回は幼稚園年長児の「発見・表現の時間」に着目して評価を行ったが、そもそも本部会は子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラム開発をテーマに掲げて研究を進めてきている。「子どもの経験を階層的に生かす」とは、子どもが発達的に適した体験、その時期に必要な体験を積み上げることであり、それが経験として後の学習に活用されるようにすることである。研究を進める中で「発見・表現の時間」と「発見科」「表現科」の目標内容の系統化を図りながら、年長児で子どもの状況に応じて実践を積み重ねていったことが、小学校の「発見科」「表現科」につながっていくととらえている。
- ・今後の課題としては、「発見・表現の時間」と「発見科」「表現科」それぞれの経験が階層的に生かされるように、子どもたちの実態に応じながら具体的内容の系統化を一層明らかにしていきたい。
- ・幼小の教員で話し合う中で、例えば年長児で見られた「自発的に発見・表現しようとする態度」については、小学校においても同様に必要なことであるということを確認し合うことができた。そのような意味では、子ども自身が活動を展開していく保育・授業づくりを今後もめざしていきたい。

参考文献

- 1) 井上弥他, 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発(1)」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第32号, 2004
- 2) 井上弥他, 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発(2)」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第33号, 2005
- 3) 井上弥他, 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発(3)」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第34号, 2006
- 4) 井上弥他, 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発(4)」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第35号, 2007
- 5) 井上弥他, 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発(5)」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第36号, 2008
- 6) 広島大学附属三原学園編『21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発』明治図書 2005
- 7) 広島大学附属三原学校園編『21世紀型教育への提言～幼小中一貫で育つ子どもたち～』溪水社 2008